

JSTA 日本熱帯農業学会

熱帯農業

Vol. 51, Extra issue 1

日本熱帯農業学会創立50周年記念講演会

- I. 研究発表要旨
- II. 学会賞受賞講演要旨
- III. シンポジウム要旨

2007年3月31日・4月1日

会場 東京農業大学世田谷キャンパス

March 31, April 1 2007



Japanese Society for Tropical Agriculture
***JAPANESE JOURNAL OF
TROPICAL AGRICULTURE***

Vol. 51, Extra issue 1



March 31, April 1 2007

47. インドネシアとカンボジアの古代遺跡の犁の浮彫に関する調査ノート

安藤和雄 (京大東南アジア研究所)

Survey Note on Plough Relief in Ancient Ruins in Indonesia and Cambodia

ANDO, Kazuo (CSEAS, Kyoto Univ. Japan)

1.はじめに 問題設定 東南アジア農業のインド化 -

東南アジア農業のインド化の一つの波は、パーラ王朝期 (8世紀~12世紀)が生み出した、ヒンズー教と密接な関係をもった大乘仏教の密教文化に伴ったベンガル型のインド犁農耕の農業技術革新の伝播であった。という仮説を私は抱いている。インド化のいく重、いく筋の波が東南アジア農業に影響を与えてきたことだろう。農業技術も一つの文化であり、文化は、複合的に伝わりやすいと私は考えている。「インド」と東南アジアの古代におけるヒンズー教や仏教文化の伝播の歴史は、寺院遺跡や仏塔遺跡などに残された建築様式、仏像、浮彫の図柄、碑文によってたどることができる。G・セデス (2002(1989): 141-142) は、8世紀におけるインドネシア、カンボジア遺跡で出土した密教系の仏像とそれをまつる堂がパーラ王朝様式の事実を示し、「八世紀の最後の四分期に、たぶんパーラ王朝とナーランダ大学の学匠たちの影響をうけて、大乘仏教は半島と群島に決定的な地歩を得た」と指摘している。東南アジアの大乘仏教遺跡である、インドネシア・中部ジャワのボロブドール及び遺跡群と村を2006年4月20日~22日にポゴール農業大学農学部のスワルディさん (Dr.Ir Suwaridi) に通訳をしてもらいながら、カンボジア・シムリアップのアンコールワット及び遺跡群、プノンペンの国立博物館とそれらの近村を2006年11月14日~19日に英語の堪能なレンタカーのドライバーを通訳がわりに訪れた。以下、その時の簡単な調査報告である。

2. 調査結果ならびに考察 - ボロブドールでは畑でベンガル犁が使われていた? -

東南アジア大陸部におけるインド化の時代には、応地 (1997:390 - 391) が、カンボジア・プノンペンの近くタケオのアンコール・ボレイ寺院遺跡の犁をもったバララマ神 (6世紀: プノンペン国立博物館に陳列、バンララマ神は、犁と棍棒を武器とする) の犁先と犁身、犁床 (写1) から、すでに、6世紀にはインド犁がカンボジアでは使われていたことを議論している。この他の古代遺跡に残された犁は、ボロブドール遺跡 (基壇部の碑文の文字の形から8世紀初頭と推定されている) (伊藤 1998: 39-41) の2頭の牛で犁を引いている浮彫 (写2) と、カンボジアのシムリアップのクメール遺跡群のバンテンスレイ寺院遺跡 (10世紀: プノンペン国立博物館に陳列) の浮彫のバララマ神が手にもっている犁 (写3) を肉眼で観察することができた。写真であるが、バングラデシュの通称パハールプールと呼ばれるパーラ王朝の初期に建設されたソマプリーマハ僧院遺跡 (8世紀) の中央寺院基壇壁面のバララマ神の石像は犁をもっている (写4)。タケオ出土の農業神がもっている犁 (写1) は、応地が指摘するように、インド犁であることは明瞭であるが、仔細に観察すると、犁先が犁身の外側から、突き刺さっているように見える。応地はこの犁先は鍛鉄であると述べているが、同じように犁先を差し込む形式の犁である、アッサム州のノース・ロッキンプールの現在ではあまり使われていない伝統犁を復元してもらい (2007年2月、写5)、肉眼で観察した。犁先は竹製であった。同型の犁をインドネシアのスマトラ島アチェの博物館の陳列品で観察した (2006年4月、写6)。アチェの博物館の陳列犁の犁先は鍛鉄であった。ボロブドール遺跡の犁耕の浮彫について、スワルディさんは「木々が背景にあること、耕起している農夫の足、犁床が見えることなどから、この図柄は、水田で水がある状況で耕起しているのではなく、畑で使っていると推定できる」と説明した。私も同感である。現在、ボロブドール周辺では、水田状態で犁が使われているが、その犁は、この浮彫とはことなり、犁へらが横向きにつき、土を横に反転させていくような西洋の犁先に良く似た形をしている (写7 真上から撮る)。現在、中部ジャワで使われている横向き犁へら型の犁は、カンボジアのプノンペンや、シムリアップで現在使われている犁 (写8、写9) とほぼ同型であることも注意を引く。バンテンスレイのバララマ神の犁は、タケオの犁とは異なり、犁へらをもった犁先と、長床犁化しているのが特徴である。犁へらは水田用の犁に現れてくる特徴でと考えられ、シムリアップとタケオの犁の違いは、400年間で、中国犁の影響と、犁の使用が畑から水田に拡大したことを想像させる。また、アッサム犁は、ベンガルから導入され

たとえることが、無理がない。パーラ王朝の美術様式は、ミャンマーのバガン遺跡群やインドネシアの中部ジャワの口ロジェグランド寺院やチャンディ・セウに大きな影響を与えている（石澤 1988:2-9）。史料からポロブドールの設計者がインドのガウデーシャ（ベンガル地方）の仏教僧カルナカルヤであるという説も唱えられている（伊藤 1998：41）。チベット仏教中興の祖であるバングラデシュのダッカ地方生まれの仏僧アティーシャは11世紀の初めにスマトラで高僧ダルマキールティのもとで12年間修行をした（Chattopadhyaya 1999 (1967):84-99）古代インドネシアにおけるパーラ王朝文化は、行き来する人々で、無理なく伝わったことだろう。



写1



写3



写4



写5



写6



写2



写8



写9



写7

(注1) 写1は応地(1997:390-391)から引用した。
(注2) 写2はプノンペン国立博物館で販売していた写真の一部

(注3) 写4は石澤(1988:2-9)から引用した。
(引用文献) G・セデス 2002 『東南アジア文化』(山本智教訳) 大蔵出版、応地利明 1997 「インド化」

『事典東南アジア』(東南アジア研究センター編) 弘文堂、石澤良昭 1988 「バングラデシュの文化遺産」、『黄金のベンガル』ユネスコ文化センター。伊東照司 1998 『ポロブドール』山川出版社。Chattopadhyaya. A1999(1967)Atisa and Tibet. Moti la Banarsidass.